

父の見た夢

鈴木照夫

萩山茂夫は風呂から上がり、体を拭きながら風呂間に入ってきたとき、妻の恵子は台所に向いて夕食の後片付けをしていた。

「ねえ」

茶碗を洗いながら恵子は首だけ回した。茂夫がバスタオルで頭を拭きながらテレビに向き、下着もつけていないのを見ると

「着なさいよ、まったく」

と小さく言った。

「なんだ？」

「風邪、引くわよ」

暖房が効いているので、火照った体からなかなか汗が引かない。しきりにバスタオルで体をこする。

「お父さん、今日も釣りに行かなかったのよ」

恵子は後ろ向きになって水を使っている。茂夫はコンピュータのソフト開発会社の主任をしているが、帰りの時間は遅い。たまたま今日は帰りが早く、田舎から出てきた父と息子の子の俊一と一緒に食事をしたが、たいした会話も弾むことなく終えてしまうと、父も俊一もそれぞれの部屋に入ってしまった。茂夫が二階に上がる階段に目をやったが物音ひとつしない。

「天気もよくて暖かったのに」

茂夫の父、喜重朗は宮城県北部で農業をしていたが、茂夫の兄、勝男が継いでからは田んぼに出ることもなくなっていた。妻を二六年前に歯に出来たガンで亡くしている。八十歳を越えて寒さが堪えるといっちは品川の茂夫の家に来る。来ても共働き夫婦ではどこかへ連れて行くとか、話し相手になれるという時間は少ない。近くの敬老会館に出かけて行ったり、天気の良い日は近くの運河へ釣りに出かけたりにして時間を過ごす。妻は近くの給食センターで、パートをしている。

「あまり釣れていないみたいだから、飽きたんじゃないのかな」

恵子が返事をしたよつであつたがはつきりとは聞き取れなかった。父は元来がっしりした体つきであつたから、これまで病気も知らずに過して来た。風邪を引いても薬を飲まない。暖かくして一晩寝ると次の日にはケロリとしている。だが丈夫だといつても、立ち

居には歳相応のものが感じられる。それでも釣りに行くときは自転車にも乗るし、糸を結ぶことも仕掛けを作るときでも眼鏡を必要としない。いまはボラがあがる時期だが持つて帰ることはない。釣れても自慢話のよつに鱗舌になることはないが、晴れ晴れとした顔になっている。そんなときに声をかけると、「うん、ふたつあげた」と答えるくらいである。

「気がすまなかっただけじゃないの？」
「それならいいけど」

恵子は洗い物を終えて手を拭きながら台所の椅子にかけた。茂夫はタンスから下着を出してつけ、ガウンを羽織って戻ってきた。

「なにか気になることもあるの？」
「ええ」

恵子は躊躇いがちに返事をした。父は恵子がなにかと世話を焼くので、居心地がいいのか、来るとなかなか帰ろうとしない。土産だといってカボチャやサツマイモをリュックに詰めて背負ってくる。

「元気がなくなつたみたいじゃない？ お父さん」

茂夫は恵子の顔を見た。深く心配しているようでもないが、気になるのか眉毛のあたりに真剣さが見える。恵子は茂夫より父と多くの時間を共有しているので、少しの変化も分かりやすいのかもしれない。

茂夫には特に変わったとは見えなかった。口数は少なかったが夕食も全部食べている。父が元気でいることは当たり前で、気になるようなこともなかったが、いま恵子に改めて元気がなくなつたみたいじゃない、と言われると虚を突かれたように気が騒いだ。それまでなんとも思っていなかった父のことが俄かに頭の中に膨らんできた。

「昨日だって、出かけたけど釣りの道具は持つて行かなかったのよ」
「うん」

茂夫には気にならないことでも恵子には心に引っ掛かるものがあるようだ。心配をしてくれるのありがたいが、余計なことのようにも思える。

「このあいだも言ったのよ」

「なにを？」

「お姉さんの夢を見たって」

「ねえねえ、だって？」

「ええ、お父さんのお姉さんよ、早くに亡くなられてしまった」

「病気で亡くなったという姉のことか」

「いーえー 一番目のお姉さんじゃない？ ちゃんと言わないけど」

父は四人兄弟の末っ子だが、一番上の姉は九つのときに肺炎に罹って亡くなっている。一番目の姉は川で溺れ水死している。父は姉のことについて記憶も少ないのだろう、あまり話すことはしない。田んぼでレンヂを摘んで遊んだというところくらいを、茂夫は聞かされたに過ぎない。父が姉のことを滅多に話すことはなかったのだが、夢を見たというのを口にしたのであれば、なにかを予感させるものがあったのだから。ずっと以前に亡くなった姉の、しかも滅多に記憶の端にも上がらないことを突然口にするのは、気が衰えた証拠なのか、茂夫は急に不安になってきた。

父はひびひびいへも行くし、妻を口くしてからもう出かけるときは服薬にも気を配りだらしない格好をするともない。畳に寝転んでテレビを見るよつなともない。俊一が横になって見ていると、「い、寝転んで見るな」と嫌われる小言も平気で言っている。

「ぶっしてそんな夢を見たのかな」
「そうよ。お姉さんのこと、もうずいぶん口にしたことなんかなかったじゃない？ それを言い出すからびっくりにしたわよ」

恵子が迷信を信じているとはないが、なぜか気になるのだという。だが父が自分の姉のことを夢にみたと言っても不思議ではないはずだ。それをことさら意味ありげにいう恵子の方が怪しいのではないか。

「あした、家にいるんでしょう？ お父さんと話をしてみたら」

「なにを話すんだ？」

「なにをって、このころよ」

あすは土曜日で会社は休みだが調べをしたいと思っていた。茂夫は親会社の焼却炉メーカーが、自治体から受注した大型ごみ焼却炉の自動化計画の仕事を担当している。清掃工場は初めてであり、知らないことも多いので、設計条件を再検討した上で、実情把握に横浜の現地にも行きたいと思っている。そのために自分が組んだプログラムが条件とマッチングしているかを確認しておく必要があった。

「お前は出かけるのか」

「出かけないけど、寒くなってきたから冬物を出しておっつかと思って」

恵子に言われるまでもなく、これまで父と二人で話し合っことをしていなかったと思いついた。特段話しておかなければならぬということもないが、用件を短く言い合っただけで分かったつもりでいたのだ。

改めて思い直してみれば茂夫は父のことをあまり知らない。早くに農家を継いだ父が忙

しそつ働いていたのを、もの心がついたころからおぼろげな記憶となっている。次男の茂夫には、何れ家を出て行かなければならないこともあつて、手伝いも厳しくは言いつけなかった。それをいいことに家の中のことに関心を持たなかった。父の小さいころのことを聞くこともしなかったし、知りたいとも思わなかった。もしこのまま行くなつてしまえば父が小さい頃にどんなことをしていたのか、姉たち兄弟のことを知るものもいなくなつてしまふ。

「うん、分かった。そつする、心配はないだろつけど」

「そつよ、喜ぶわよ、きつと。息子だもの」

茂夫は恵子の「息子だもの」というのが恥ずかしく聞こえた。五十近くになつて息子もないものだが、父から見れば紛れもない息子なのだ。

「わたし、風呂に入つてくる。上がったらビール飲もつ」

恵子は茂夫が了解したことでひとつの義務を果たしたように、弾んだ声を残して立ち上がると、茂夫の肩に手を置き、台所と廊下を挟んだ浴室に向かった。恵子が肩を軽くポンと打つのは、若いころ一緒に入つたという合図だった。茂夫がそつすると、あとから恥ずかしそつに入つてきたものだが、子供が大きくなってからは、忘れてしまったようにどこらからでも合図を送らなくなつてしまった。そして久しぶりに恵子が肩を打つのに茂夫が振り向いたが、恵子はなに食わぬ顔をして浴室に消えた。茂夫は苦笑いを浮かべ、テーブルの上の新聞を手を取つたが、すぐにテレビに目をうつした。新聞もテレビも目には入らなかつた。

父が見た姉の夢は、思えば思つほど気になつてくる。恵子に聞いたときには聞き流していたが、元気がなくなつてきているという言葉と併せて考えてみれば、父の中で重くさせているものがあるようにも思えてくる。

翌日の土曜日、遅い朝食を囲んだとき、茂夫はそれとなく父を見たが、特に変わつていない様子は見られなかった。鮭の塩焼き、ほつれん草のおひたし、海苔、シミミの味噌汁、それに一杯のごはんを残さず食べた。無理に食べているようでもない。

「今日は釣りに行くの？」

相変わらず快晴が続いている。南側の窓一杯に陽が差して床の絨毯を膨らませている。

僅かに楢がゆれているが寒い風ではない。

「俺も行つてみるかな」

「うん、うん」

「釣りだよ」

「行くのか」

「行くんなら付き合ひよ」

「どうするか 考えているんだ」

「考えることでもないだろう、寒くないよだし」

「公園がいかと思っしわ」

家から七、八分のとこるに釣りで賑わっている運河に沿って、緑道公園が延びている。遊歩道の両側に大木が残り、広い芝が広がっている。父は釣りに行きたいと言わない。ついこの前までは食事中から

「釣りに行ってくる。いいと見つけたんだ」

食事を済ませるのももどかしそうに、そそくそと道具を担いで出て行った。気が向けば朝食前にも出かけ、食事を終えてまた出かけて行くこともあった。あんなに身を入れていたのに、急に行かなくなってしまったのはなにかあるのかも知れない。食事を終えた俊一が言った。

「出かけてくる」

「どこへ行くんだ」

「友達よ、渋谷」

「帰りはいつになるの〜」

「分かんない」

「遅くなったら、連絡しなよな」

恵子が母親らしく言ったが、「ああ」と面倒くさそうに椅子を立った。俊一は中学に上がってから急に口を利かなくなっていた。食事時に話しかけても「うん」「別に」と短い返事をするだけである。恵子が機嫌悪そうにしているのを見て、茂夫が繰り返した。

「連絡しなよ」

俊一は振り向いて「うん」と階上がった。まったくしょうがないんだから恵子が俊一の後ろ姿を見やりながらため息をついた。

「私の言いついはおっほいなんだから」

「がみがみ言っただけでは、煩さがられるだけだよ」

「本当に甘いんだから、あなたは」

夫婦が言い合っているのに何もすくなくなったのか、
「外へ行ってみるか」

積極的でないその言い方はやはりどこか体調に優れないところがあるのだろうか。父の特徴である尖った頬骨も目の窪みも変わりはない。短く刈った頭髪はほとんど白くなっていて、急に増えたというところもない。肩幅が広ががっしりした構えも衰えてはいない。茶碗を両手に持ってゆっくり茶を翫っている。

「どこか行くところがあるの？」

「なくはない」

父はゆっくり茂夫に向いた。そして恵子に移したが、恵子の目に会って逸らしたのは恵子のほうだった。その逸らし方にも慌てた様子があった。父はなにか感じるものがあったのか目を戻すと遠くを見る目になった。その姿を見ていると父に対する切ない気持ちが生じてきた。

階段を俊一が駆け下りてきた。

「行くところ」

目も向けなくて玄関を出ていった。まったくしよつがないんだから、恵子がまた小さく不満をもらした。

「若いつのはいいな」

ひとりよごのまじに父が呟いた。茂夫も恵子もなにをいっのかとその後を待ったが出てはこなかった。

「うさこいるのもいいわよ、外は寒そうだし」

恵子が付け足したまじに言ってみるが浮いている。べつして出かけることが億劫になってしまったのか、聞いてみたい衝動にもかられたが、

「そうだな、それがいいよ」

と明るく言った。恵子が立ち上がってテーブルの上を片付け始めたので、茂夫と父は立ち上がり、台所に続いている屈間のソファに移った。テレビはどこの活気だっている市場の様子を映している。「これからますます忙しくなる」とレポーターがコメントしている。

「昨日は釣りに行かなかったの？」

「ああ」

「寒くて釣れなくなった？」

「その日もなご」

「じゃあ、行っつてはいいの？」

「うん、いや、ちょっと気が乗らないんだ」

「どうして？」

「殺生は止めようと思ってな」

父はずっと大事にしてきたことを、ふりやへ口にしたあとのふつと、柔らかな表情になって、流しに向いている恵子の後ろ姿に目をやめた。

「あのな、このあいだ、釣りに来ている人がガンに罹っていると言ってた。それも肝臓だった」

「知ってる人？」

「知らないだろっ、いつも釣り場で会う人だ。その家に呼ばれて行ったこともある」

そんなことがあったとは知らなかった。もしそうなら近くにおいて挨拶もしないのは常識だろう。父がお世話になっていきます、くらいのことと言わなければならぬ。

「近所の人なの？」

「うん、ここから三十分くらいかな、歩いても、大森の近くだった」

「言ってくれればお礼に行けたの」

「ひとりで暮らしているけど、自分のペースを他人に乱されるのを嫌っているようだ」

「ガンだなんで、そんなこと自分で言ってるの？」

「うん」

「自分でいつくらいなら、まだ初期の段階じゃないの？」

「そつでもないから」

「だって、本当に悪いなら釣りどころではないだろうっと思っけど」

「治療を勧められたが断ったと言ってた。名古屋に娘さんがいて、なんども一緒に住もうと言われているが断り続けているの、べ、とまぎまぎは見にまてくれるそつだ」

「どうして？、行ったほうがいいの？」

「世間的にはそつだろつが、自分らしくなくなるから嫌なのだって、誰にも迷惑をかけるいで死にたいが、誰もいないところで死んではそれも迷惑なことだろつと気にしている」

「娘さんだって、遠くで心配しているのは大変だろう。一緒に住んで面倒みてもらったほうがいいのじゃないのかな」

「行けば入院させられるし、治療も受けなければならぬって」

「当たり前じゃないか、そのほつがいつて、治ったらまた好きなことができるじゃないか」

「いや、治らないらっこ」

「本人が言ってるの？」

「うん、近頃、女房の夢を盛んに見るらしい、呼んでいるんだって、最後の近づいている

のが分かっていようなんだが、それを恐れていないのが羨ましい。釣りをしたり友達に会ったり、映画や劇場に行ったり本を読んだりしているんだ」

「治療をしなかつたら、ますます悪くなるだけじゃないか。いくつくらいの人？」

「七六つて言ったが、わしは名古屋行きを勧められなかった。家に行ったときに酒を出してくれ、二人で飲んで釣りの話や戦時中のことを話したりしたけど、こんなに愉快的な時間は久しぶりだと喜んでいた」

「ぶーん、それでも酒なんかよくないだろう」

「一人っ子を亡くしているんだって、これ以上生きているのは自分には必要ないって十分生きて来たからそれでいいんだって。無理な長生きはしたくないって」

「強がりじゃないのかな」

「いや、本当にそう思っているようだ。話し方が淡々としている。気負いもない。卑屈になることもない。普段と変わらない話し方なんだ。感心したよ」

末期のガン患者と思われる人が、治療をしないと切り切ることが、話としてはあるにしても現実にはできないだろうか。父の作り話とも思えないが、俄かには信じることができない。「あまり急なことでは気が動転しているんじゃないのかな。早く治療を始めて治りたいと思うのが普通ではないのかな」

何度も同じことをいつ茂夫「

「そうかもしれないけど」

「と、あっさり認めな。これ以上繰り返しても仕方がないというよっ」

「だったら、勧めたらいいじゃないか。早く娘さんのところへ行って医師と相談するよっ」
「っ」

「っん、それは何度も言ったわ」

「それでなんと言っていたの？」

「ありがたいが自分のことは自分で決めろって。それ以上のことと言わなかった」

父のいつことを耳にしなかったのだから、他の人でもだめなのだろう。すると本当に治療をしないと決めているのかもしれない。

もし父がガンになったら茂夫はどんな態度をとるだろうと自問した。ガンでなくても体調を崩せばすぐに病院へ行くことを勧める。自分にはそれ以外に考えられない。父がなんと言おうと入院させ、どんな治療にも耐えるように説得するだろう。

恵子が台所の片付けを済ませて茂夫のとなりにかけた。

「どうしたの、深刻な顔して」

「ああ、親父の釣り仲間がガンになっていて、それでも病院に行かないんだって」

「たいしたことないんでしょう、ガンといっても」

「程度は分からないが、それでも病院に行って手術するとか、抗ガン剤を投与してもらったかするんじゃないのかな」

茂夫は同じことを言った。恵子は他人ことでもあって気軽に受け答えしている。窓の外でクウクウと鳩の鳴き声がしたので目をやったが姿は見えない。葉をすっかり落とした桜や樺の細枝が青い空を縫っている。

「わしがな、もしもガンになったら同じようにしたいと思ってるんだ」

「同じようにって？」

茂夫は父にオーム返しに聞いた。一瞬なんのことか分からなかったが、やや間をおくと父がガンになっても知人と同じように入院しないで、やりたいことをして過ごしたいということなのだと言いつつ、

「親父、どこが具合でも悪いところがあるの？」

「いまはなさ」

「だったら悪い冗談はよしたほうがいい。心配するじゃないか」

「そうだな」

父は目を外へ向けて青い空を眩しそうに見た。その目には親子でも一線を画する距離が感じられたが、穏やかな気持ちが現れているようにも見えた。

茂夫は普段、父の寂しさを思いやることが少なかったのではと悔いられた。父は多くの肉親の死と向き合ってきた。知人のガン患者が入院を拒んでいると聞き、父が経験したいくつもの死と重ね合わせて、同じ心境になっているのではと気がして、父の顔を見たが、眩しげに細めている目は対象があるがままに見ているようで、それ以上他人に立ち入ってもういたくない距離を感じさせ、ぞっとするものがあった。

「くくり「まさんには二回くねえ、降ったかな」

「いつか？」

茂夫の沈んだ気持ちを癒すような、ほとんど忘れかけていた山の名が聞こえた。するとあの「栗駒山」の裾野を広げた雄姿が思い出された。

「栗駒山に雪が二度降ったっちゃ、もついつペン来たたら、こいつらにも降るペン、それまでに片付けでおがねばな」

村の人たちは会って挨拶代わりの言ったものだ。田んぼも畑も冬の準備に追われていた

のを思い出した。栗駒山か、なだらかな起伏の稜線が目に見え、そのいたたきが白くなっているのが、くっきり見えていた。いつも見えているときにはなんとも思わなかったが、久しぶりに目に浮かぶ山は無性に懐かしかった。

「茂夫、お前は「こゝろすつと暮らすのか」

「あゝ〜」

茂夫は恵子に目をやってから父に向いた。急にそんなことに念を押すのは息子の行く末に不安なものを感じているのだろうか。

「田舎に来ないか」

茂夫は無茶な話と一蹴しようとしたが、父の気持ちも分からないではなかった。

父は家についてもいまは自分のことにくらいつくことがない。田畑のことや冬の準備もしない。気は焦ることもあっても兄がするのを見ているほかはない。昔はみんな自分でやったものだとよく口にしていた。冬中の囲炉裏で燃やす薪も軒に積み上げていた。馬の餌になる糞も納屋に積み上げていた。いまはその用意もいらなくなった。その代わり農作物の管理はパソコンになった。すべて経験と勘に頼っていた父の時代には考えられなかったことである。

「そんなものに向いていたらって、米はできねえ」

遠くから腹を立てているのが精一杯だが、それも認めなくてはならなくなっている。しかしパソコンだけで米が作れるわけがないのも事実である。

「肥料の量は「れでええかな」、「種時はそんな時期かな」

兄が助言を求めれば嬉々として、また自分の出番があるのだと言わんばかりに自説を述べる。そんな頑固さもいつの間にか薄れてきている。同時に家の中では少しずつ自分の居場所も狭くなってきているようだ。高校を終えてすぐ家を出た茂夫だが、気持ちもどこかで頼っているものがあるのかもしれない。

「田舎じゃ、仕事がないだらう、いまなら農家もできないし、定年にならば別だが。いまは先が読めないしな」

「あなたのところ、どうかなるの〜」

父がなにが言おうとしたらうらやまだったが、恵子が口を挟んだ。

「そんなこと分らないよ、いいとも悪いとも。いまはよくてもある日突然怪しくなることだって珍しいことではなない〜、その逆もあるけど期待はできないな」

「突然、あなたが失業したらどうなるのよ、「こゝろすつと暮らすのか」

「たこえはの話だ、そのとこにならうたらどうなったら考えなくてはならなないだらう〜」

「たとえばと言っても、ないとは言えないでしょっ」

「それはそつだが、心配ばかりしててもしょうがないわ」

「大丈夫なんですよ、あなたのことろは」

「ああっ」

茂夫は自分の会社が怪しくなるとは思っていない。仕事は忙しいし給料も悪くはない。

ローンを払っても生活が困ることもない。恵子のパートも助かっているし、俊一は反抗期ではあるがぐれて親をていずさせることもない。考えてみれば茂夫の生活は遠慮なほど順調なのだ。しかしいまは仮定の話を続けているときではない。父の考えを聞いておくのが先だ。

「昔の夢を見たんだって？」

「姉のことか？ 久しぶりだ。忘れたことはないが急に出てきた」

「小さいときに亡くなったって人」

「うん 八つだったな、ふたつ違いだった。いまでもはっきり覚えている。そのころのことは何も覚えてはいないが姉のことだけはな」

父は惚けていないし、言つことも動作も元気な人と変わらない。

「どうしてだろっかな」

父はさも不思議なものを見たように言ったが、茂夫にはなにかを暗示しているようにも思えるのだが、それがなにかは分からない。

「あれには可哀相なことをしたよ。わしがよく見ていけばよかったのだ」

父はまた遠くを見るような目になって外を向いた。その目には懐かしさばかりではないものが浮かんでくる。

「わしがよく見ていけばね」

父はいま確かにそう言った。そのとき茂夫は祖父も祖母も若くして亡くなっているのを感じ出した。それとなにか関係があるのだろうか。父は多くを語らない。自分の父母のことも、兄弟のことも多くを語らない。父を取り巻く肉親はみな早世しているが、自分だけが長生きしているのを恥じているのだろうか。むしろそれなら誇りに思うべきではないか。父は立ち上がった。

「ちゅっとうと出かけいへん」

用事があったのにとはいはないが、気を利かせたのかもわからない。

「どういへんの？」

「うん、その辺りを歩いていへん」

居間の奥の自分が寝ている部屋からジャンパーとマフラーをとると玄関で靴を取り出した。恵子が手袋をしたらしいじゃないの」と注意すると思いついたように戻って帽子も被って出ていった。テーブルに戻った恵子は

「ねえ、やっぱり変でしょ」

父の言動には思わせぶりなところも見えるが、気にするほどでもない。

「そうとも思えないけどな、いまの話だって普通だよ」

「それならいいじゃん」

茂夫より恵子のほうがより父を思いやっているのだろうか。少しの言葉の意味や仕種の端々に父の陰りを見るのがごめんなのだろうか。たとえそれが見出せたとしても意味のあることには違いないよめめる。

「あなた、なにか用がありますっ」

父のことをあれこれ思いめぐらせていると急に恵子は話題を変えた。女は変わり身が早いと少し腹を立てて「別に」と恵子の口を真似た。

「だったら、買い物に付き合っつて。大井町のスーパーに行きたいから、車を出してくれない？」

買い物は一人の休日にもとめてするのが習慣になっていた。簡単なものは近所でも間に合っつが休日にもとめ買いをする。

「じゃあ、お願いな、お昼は外でいいわね」

恵子は嬉々として立ち上がる。鼻歌交じりに洗面台に向いた。時間は十一時を過ぎていたので、これから出かければ昼食にちょうどいい時間になる。

父は散歩に出ていったが敬老会館にも行ったのだ。そこで知り合った友人とおしゃべりをしてくるのだ。茂夫はほぼ完成しているプログラムソフトを目で追っていたが身は入らなかった

夕方、茂夫と恵子が帰ってくると、居間で父と茂夫が楽しげに話している。茂夫が側に寄っていくと、農作業には欠かせなかった労働力として飼っていた、馬のことを聞かせている。

馬の世話は大変で、なかでも馬小屋の敷き藁の取替えは子供には重労働であった。藁は濡れて重くおしっこをかけられたりした。屁をするとな、一緒に藁がとんできて頭から体中にくっつくのだ、これがもう臭くて臭くて、と顔をしかめると俊一は体をよじって笑い転げる。茂夫にも恵子にもめんな態度は見せないのに親子以上の親しさだ。茂夫はなに

安心するものがあると同時に、羨ましくもあつた。

「楽しそつじゃないか」

茂夫が割つて入ると、「一人はそれまでぶきけ合つていたのを、急に固くなって話題を変えた。

「それもどられてしまつてな」

「どられたつて、なにをれ」

「あつ、いい馬だったよ。よく働かし、わしのつづことが分かつたからな」

「馬が人の言つこと、分かるの？」

「分かるぞ、こつちが疲れて休みたいなあ、と思つているときは態度で分かるのだ。ヒーンと声を上げるんだ。それでなんと励まされたかしれない。反対に馬が疲れて小屋から出たがらないときは、鼻面を撫でて言い聞かせてやる。代掻きは人の手でやっていたのは間に合わないし、いへら疲れてつてもその日のつよはその日のつちに終わらせなくてはならないからな」

茂夫は両親が暗くならないと田んぼから帰らないことのもかつた時期のあることを思い出した。だれもない家で腹を空かせて待っていると、遊んで疲れた自分には目もくれず馬の世話を始める。

「糞を運べ、飼葉を作れ」

次々と用を言いつけるのに、足をぶらぶらかせながらやつてくるよ

「もたまたますてるんじゃね、夜中になつてすまじや」

父の怒鳴り声が降ってくる。そんなときの父はなにかに取り憑かれたように作業に夢中になっていた。母も食卓の支度を始めるが、その時間の長かつたことはない。

「俊一は知らないだろつが、戦争にどつられてしまつたよ」

「戦争つて、あの太平洋戦争のこと？」

「あつ、そつだ」

「なん頭？」

「二匹だ」

「それどつしたの？」

「南方に連れて行かれたといつことは聞いたが、その後のことは分からない」

「戦争に馬がいるの？ 戦国時代や西部劇の映画で見たことがあるけど、まさか人が乗つて駆けるつてことはないでじやない？」

「重い荷物を運ぶのに使われたのだろついな、きつと」

父は窓の外へ目を向けた。恵子がみかんを盛った皿をテーブルの上に置いて茂夫の隣にかけた。俊一は覆いこるがるようにソファに横座りになっていたのを座りなおした。

「行くと決まってるからは、田んぼにも出さないで、好きな草を刈ってきてたっぷりやって、体を拭いてフラシをかけてやるのだ」

「へえっ、馬が使えなくなると困るんじゃないの？」

「困るけど仕方がないさ」

「戦争へ行つて、そのあとどうしたの？」

「行つたきりだよ、戦争は案外とこころではない、惨めなところだよ。どうなったかは想像がつくだろう」

俊一もある程度は分かるはずだ。真剣な目の中に悲しみを浮かべている。父もそのまじろのことが思い出されるのか口が重くなっている。

「それでもな、農家の仕事は休んでいられるわけにはいかない。若い馬を買って育てるがすくには役に立たない。馬が慣れるまでには時間がかかるのだ」

「いやだつて、言えはみかつたの？」

「ははあつ、馬を出すのがいやだつてどうなの？」

父は笑ったが苦しそうな顔になっている。いやだといつことが許されない時代なのだが、それをどうやって俊一に説明すればいいのだろうか。

「俊一はいいよ、自分のやりたいことをやって、言いたいことが言えて、それが当たりまえなんだが、そこまで来るにはずいぶん遠回りして来たんだ。犠牲もたくさん払ってきたのよ。それを後戻りさせないようにするのが俊一たちの役目だ。忘れるな」

茂夫も恵子もそのとおりだと頷いたが、父はそれ以上を言わなかった。

「南方つてところは食料が足りなかったつて本で読んだことあるけど、馬はみんなで食べたんじゃないの？」

「ううん、それはない。それは絶対にない」

父は吐き捨てるように言った。

「手塩にかけて育てたつていつの間に、泣く泣く徴用されて、それで兵隊の口に入ったので、は我儘でおきなごい」

俊一は祖父を怒らせてしまったことが気になって言いわけがましく言った。

「僕はただ、思いつきで言ったただけだよ」

父も俊一に腹を打てたのではなごい。

「あ、いっしょにはよくみてたから、まじろ、殺はわけてしまつちうなごいとなつたら逃げている

よ。逃げてジャングルの中で生きている。わしはそう思う」

父の目がわずかに潤んでいるようにも見たが、固く口を結び感情を抑え耐えている。

「ジャングルの中だね」

もう一度言つと、つつと喉を詰りらせ拳で顔を拭つた。父の目には鞭で打たれ、足を取られながら、ハアハア荒い息を吐き懸命に進んで行く姿が浮かんでいるのだらう。背にはは放り出したくなるような弾薬と砲車を引きながらの行軍は、農家の代掻きより辛くない。だれもが疲れていては馬を世話するのも、鼻面を撫でてやるのもいらないだらう。汗をかいても拭いてやるものなどいらないだらう。力尽きて倒れてしまえばその場に置き去りにされ、たちまち獣の餌食になってしまう。しかしジャングルの中で野垂れ死にする。ことなど父には想像もできない。いや、想像したくないといったほうが正しいかもしれない。任務を全うして年老いた後に静かに死んで、手厚く葬られたとしか思えないのだ。

みんなのために働き、力尽きたとしか思えない。戦場では人も辛いが馬も辛い。慣れない土地と気候の中、道なき道を経験したこともない重労働で、兵と馬が苦勞を分け合っていたのだと思つしかなかったのである。

「馬の力って強い」

俊一が聞いたのに、もう一度顔を手の平で拭って、気を取り直し

「そりゃ、強いぞ」

父は得意なものを披露するように座りなおした。

「そつだな、大人二十人分はあるな。それもだ、藁や草を食つただけでいいんだ。こんなありがたいことはないよ」

俊一も感心したように目を輝かせた。実際俊一は競争馬しか見ていない、走るために調教された馬で、足が細く流れるような体の線がきれいな馬しか知らない。父の目には首や足が太く、体がずんぐりした馬が、なんども足を踏み直し踏ん張っていく姿が頭に浮かんでいるのだ。

「わしが死んだら葬式は簡単でいいからな」

父は俊一の問いかけに合わせていたが、それでも気持ちの整理がつかないのか、しばらくじつとあらぬ方を見ていた。単に感傷だけではないようだ。そして咳のように言ったのだ。

「親父、なんでそんなことを言つたんだ」

「あつ、いや、わしも歳をたったからな。この歳まで生きれば儲けものだ。身内だけで済

ませてくれ

「なに言っているんだ、そんなこといま言わなくても」

「いつ来るか分からない、人の死つてのは」

「おじいちゃん、病気の？」

余計なことを言ってしまうて気になったのかゲーム機をいじっていた俊一が顔を上げた。

「いや、大丈夫だ。お前たちの顔を見ているのがわしにはいい薬だ」

「そんなら、そんなこと言はないほうがいいよ」

俊一は親にでもいうようなませた言い方をした。父は俊一に向いたがすぐ視線を外して関係ないかのように装った。

「本当に、なんともないの？ 痛いとか、だるいとか」

茂夫がソファから身を乗り出して聞いた。父は同じことをなんとも聞くな、とでもいう
まい。

「ああ、」

返事ともため息ともつかないようにいつと黙ってしまった。

「いくつときき、お姉さんが亡くなられたのは」

恵子がさり気なく問ったが、父はちらつと恵子に向けた顔をまた外に向けた。茂夫から見える横顔に額の皺がくつきりと浮いている。目じりの皺も、茶色に日焼けした皮膚も、
畳んだように見える。顎の短い髪は黒いところがない。茂夫は改めて父の年齢を知らされ
た。大正十二年の八月生まれである。八十を過ぎればだれでもこの程度のこととはしかたの
ないことだけれども、それでも年齢を強く感じさせる。「元気ですね」と挨拶代わりに言
われるのもそれほどうれしくないようだ。

「あいつが死んだのは八つときだったな」

やっと言ってみる気になったのか、「こゝで言わなければ機会を無くしてしまつて思った
のか父は重い口を開いた。

「亡くなったお姉さんですが」

ときおり水死した姉のことを語ることはあつてもぼつりと言つてくはないのだ。仲がよか
つたといつことであつたが、そのため言いつくかったのであるつが。

「可哀相なことをした」

父がまた口を噤んだ。それ以上を言つては辛くなるのか下を回つてこつてこつてこゝろ。恵子
も父の姉が死んでいることは聞いてはいるが経緯は知らない。断片的なことをなんとなく聞いて
も繋がらないのだ。

「事故だったんですよ」

恵子が念を押すように言つて父の睨む目が茂夫に向いた。

「ああ、わしだけだった、そばにいたのは、あのとき気持ちが動転していなかったらと思つて悔しいよ」

「動転つて、親父が？」

「ああ、なにがなんだか分からなくなつてな、それで」

「事故を前にしたら当たり前だよ。六つくらいならなおさらだ」

「そんなに気になさることもないではありませんか」

父は天上を向いて考えていたが、

「こんなことだ」

意を決したように語り出した。あるとき喜重朗は父と姉とで近くを流れる迫川に馬を洗いに連れて行った。途中で父は田んぼを見ていくと、手綱を喜重朗に渡して畦道に入つて行った。馬を川に連れて行って体を洗つてやることは、どこの家も子供の役目なので、男勝りの姉をそのまま馬の背に乗せ川に向かった。姉も慣れたもので両手を「ばなぞい」の形にして道の端に伸びている木の枝に触れたりする。

川へ下りていく道は長い下り坂で、しかも濡れていて滑りやすかった。喜重朗は馬の轡をとつて「どつ、どつ」と声をかけながらゆっくり一歩一歩進めていく。少しでも馬が足を滑らせたり、躓いたりしたら背の上で首にしがみついている姉が振り落とされてしまう。それでも馬も人もなんども通い慣れた道なので、なにこともなく川に下りていくことができた。

「ジューはつまいもんだ」

馬の背で姉が言つのに喜重朗は得意になつて、浅瀬から中州の砂利を踏ませ流れのある反対側の岸に進めた。馬の足首が浸るあたりまで来ると、馬を止めて荒縄を束ねたたわしで足裏を擦つた。足を洗い終えるとまた進めて腹部の浸るあたりまで入つた。腹を擦るとくすぐたくなつたのか、急に前足を踏み出した。すると馬の首が下がり、背で手を放し木の枝を掴もうとしていた姉は、たてがみを滑つて真つ逆さまに水中に落ちた。鋭い水の音と飛沫に馬が驚いて暴れ出し、持っていた手綱を振りほどいた。

「ドドッ、ドドッ」

喜重朗の焦つた声で叫んでも馬は聞こえないのか、深みの中で立ち上がった。跳ね上げた飛沫と小砂利を喜重朗の頬を打つた。馬は向きを変えたと下りてきた坂を駆け上がっていった。なにが起つたのか理解できないまま、鋭い蹄の音が遠ざかると周りが急に静か

になった。するとそれまでまったく耳に入らなかった蛙の鳴き声がぐわんぐわんと早鐘のよつに聞こえてきた。どこかでチツツと鳥の鳴く声も混じっている。

水音の立つたあとには青く澄んでゆったりとした流れが白い雲を映している。姉がいない。走り去って行った馬の背にも姉は乗っていなかったと分かる。

「ねえちゃん」

喜重朗は切なくなつて繰り返し叫んだが、むなしく川面に流れていくだけである。だれも聞きとめて駆けつけてくれる者はいない。川の両岸には雑木が鬱蒼と繁っている。雑木の切れているところは高い崖になって、大きな声を出しても聞こえるはずがなかったのである。いつもなら誰かが川で釣りをしていたり、牛や馬を引いてくる人がいるのだが今日は見当たらない。喜重朗はだんだん不安になってきたが、いまなにをしなければならぬのかがまったく分からなくなっていた。泳げなかったわけではない。素潜りも同じ年頃の子に比べたら達者なほうである。それにもかかわらず胸まで水に浸かった体は、固くなつて川底に根が生えてしまったように動かなくなってしまった。

「ヤー、ヤー」

突然、切羽詰まった声で姉の名を呼ぶ父の声と、地下足袋の水を蹴る音とが重なつて全身を振るわせた。

「八重は、八重はどつした」

喜重朗の肩を掴むと激しく揺すつたが、声を上げることはできなかった。震える手で指差した先に、父は半纏と地下足袋を脱ぎ捨て飛び込んでいった。喜重朗は水の響きに我に返りシャツを剥ぎ取ると父の後を追った。大きく息を吸つて水に潜った。水中は薄暗く底の石ころはぼやけていたが判別できないほどではなかった。息が切れると顔を上げてまた潜った。

馬が足を取られたあたりになんとも潜つたが姉は見つからない。父は狂つたように顔を上げると、「ヤー、ヤー」叫んで潜り続けた。喜重朗は姉が馬から落ちたときにすぐ飛び込んで行かなかつたことが、だんだんと悔やまれてきて夢中で潜り続けた。そうして繰り返し潜っていると大人たちが駆けつけてきて

「どつした」「なにがあったのか」

と口々にいうが一人には助けを求める余裕はなかった。一人が馬を連れて戻ってきた。放れ馬を見てなにかあったのだと悟つてくれたのだ。返事がなくても親子がしきりに潜り続けているのを見て、その真剣なのにただこころではないと気がつき

「溺れたのか」

喜重朗は泣き声になって、

「ねえちゃんが」

やっとそれだけを言つと、すべてを察して、

「消防団と駐在署に連絡だ、竹ざおと人を集めてくれ」

一人が言いながら着ているものを脱ぎ捨て下帯ひとつになると水の中へ入っていった。

馬を連れてきた人が手綱を木の枝に縛りつけ、坂を駆け上がっていった。

「どのあたりだ」

喜重朗が指を指すと、

「お前は上がつていろ」

腕をとって背中を押しした。人がどんどん増えて長い竹ざおをなんども突いている。さおから滴るしずくに夕日にあたり、姉が大事に持ち歩いていた赤いビーズ玉のようで、それを見逃すまいと目で追っていた。

それからどれくらいだったのか、あたりが暗くなり始めたころぐったりした姉が引き上げられた。馬が躓いたところからずつと下流の木の根に引っかかっているのが見つけられたが、すでに意識はなくなっていた。

父は苦渋に満ちた顔を外へ向けた。それまでにもときおり苦しそうな表情をすることもあったが、茂夫にはどつしてなのか疑問であった。姉のことも詳しくは聞かされていなかった。原因は父が苦しむほどのことであつたのかは分からなかったが、いま聞いても事故であり不可抗力である。それでも父にはその後ずつと背負つて来た重荷であつたのだ。あのとき馬から降りしていれば、早く自分が飛び込んでいれば、助かったかもしれないのだ。自分を責めてきたのだ。家族中を悲しませてしまったことを悔い続けてきたのだ。だからだれにも言わず、必要以上には手を入れないあの家で暮らし続け、姉がいたであろうことを思いながら、僅かな姉の暮らした形跡を大事にしなからずつと過ごしてきたのだ。

あれが月命日だったのだろうか。家には過ぎるほどの大きな仏壇に毎月決まった日に村の任職が読経をあげていた。いまでも父は続けているのだろうか。ひとりじつと仏壇の前で首を垂れ続け、七十年以上を過ごして来たのだと思つと、父があわれになってきた。事故ではあったが、もし助けられたにしても、そうでなかったにしても、この長い年月を思えばどつくに時効になつていゝはずであるが、供養を欠かすことなく過ごしてきた父の気持ちの悲嘆さが茂夫の体を震わせた。

もつといいよ、もつといいよ、と書いてやりたいが、それで父の気持ち軽くなるわけでも

ない。どうしたら少しでも和らげることが出来るのだろう。ずっと背負ってきた罪深い心から開放してやれるのはいつすべしなのか考えも浮かばなかった。

「そろそろ、帰らじかな」

「えっ、もう帰るの？」

「村の友だちだっているし、それにあの家で育った者がみんないるんだ」

「みんなっっっ」

俊一が怪訝な顔で父に向いた。それに父は僅かな笑みを浮かべた。栗駒山を見放く風景と、馬を含めた先祖の生活の匂いが残っている屋敷の中の生活は、都会の込み合ったところより、父にはずっと幸せなのかもしれない。

祖父と祖母の死も、幼くして亡くなった子供を嘆いてのことなのだと言った。父は自分だけが生き長らえたことで、怠惰に過ごすことは出来なかったのだ。懸命に生きることでしか償えないのだという信念があったのだ。そして自分もそのときが来たら素直に従おうとしているのだ。

「また、来るでじやないっ」

「ああ、来るよ、なんどもね」

父は俊一のほつを見ないで言った。その顔にはもう来れないかも知れないという気持ちがあるように見えた。父にも水死した姉の呼んでいる声が聞こえているのだろうか。

「送ってこへよ」

「ぶん、書録するのには早いな」

父の即座に否定した声は、意志の強さと毅然とした生活態度が衰えていないことを語っている。好きなようにさせて置くしかない。と茂夫は思った。近く三人であの父の家に帰る。そして屋敷内を隅々まで見ておく。父の小さくころのことを少しは見つかるともされないから。そのあとにもう何年も行っていない迫川の流れを見たい衝動に強く駆られていた。